

# 法学部新入学生の日本語力に関する調査

—IRT 診断テストと Can-do 自己評価の結果—

田島ますみ

- <目次>
1. はじめに
  2. 調査方法概要
    - 2.1. 日本語 IRT 診断テスト
    - 2.2. Can-do 自己評価
  3. 結果
    - 3.1. IRT 診断テストの結果
    - 3.2. Can-do 自己評価の結果
    - 3.3. IRT 診断テストと Can-do 自己評価の相関
  4. 考察
    - 4.1. 日本語力の多様性
    - 4.2. 大学での学びに必要な日本語スキル
  5. おわりに

## 1. はじめに

少子化の進行と大学数の増加に伴い、多様な学力レベルの学生が大学に在籍するようになった現況において、大学の授業をどのように成り立たせていくかは重要な課題となりつつある。さまざまな大学生たちに対して、教育の質を保ち向上させる努力は多くの大学で実践されるようになってきており、初年次や補習教育科目の設置、習熟度別クラス編成などの具体的な試みがなされてきている。

中央学院大学においても学生の学力レベルやニーズを考慮しながら、文部科学省の指針である「学士力」の養成に向けて大規模なカリキュラム改革が進行中である。法学部に2006年度から開講されている「日本語実践」はそれまでの「国語」を改編した初年次必修科目であり、日本語力の向上を目的としている。「学士力」や経済産業省の提唱する「社会人基礎力」、厚生労働省の「就職基礎能力」など、社会で求められている能力の基礎固めを担う役割を持つ。少人数クラスで文章指導を含めた内容としているが、今後、どのような方向性を持ってこの授業をより質の高いものとしていくかは、カリキュラム改革の進む中での検討課題である。

一方、「日本語実践」開講の2006年度以降も入試の多様化は進み、本学法学部に入学する学生の日本語力は把握しにくくなっている。学生間の個人差はかなり感じられるものの、はたしてどの程度のものであるのか。また、大学での学びに必要な日本語力、いわゆるアカデミック・ジャパニーズに関して、彼らはどの程度の準備ができているのか。日本語力の測定の難しさ、また下位レベルの広がり等により、把握は難しくなっている。

今回の調査では、法学部新入学生の日本語力の実態把握のため、語彙についての客観テストと Can-do statements を使った自己評価という2種類の評価方法を用いた。その結果を報告するとともに、それを踏まえて、今後の日本語指導をどのようにしていくべきか考察する。

## 2. 調査方法概要

中央学院大学法学部の初年次必修科目「日本語実践」履修者全員を対象に、2012年4月9日から24日の間の授業内で、日本語のIRT診断テストとCan-do statementsを使用したアンケート調査を実施した。「日本語実践」の履修は留学生枠で入学してきた学生は別の科目を取ることで免除されているため、この中に留学生は含まれない。留学生ではないが1名、日本語が母語ではない学生が履修者に含まれていたが、IRTテストの解答に不備もあったためデータからは除いた。今回の調査対象者は全員が日本語母語話者である。

なお、「日本語実践」の再履修クラスでも同様に実施したが、今回の調査の目的は新入学生の日本語力の把握としたので、データからは除いた。機会を改めて報告したい。また、記入の不備などでデータとできない解答/回答結果があったり、二つを同時に実施しなかったクラスがあったりしたため、IRTテストとCan-do調査でデータの数不一致を断わっておく。

### 2.1. 日本語IRT診断テスト

「IRT診断テスト」は、現在、NHKエデュケーショナルが制作・監修している基礎学力判定テストで、日本語・英語・数学があり、全国の大学・短期大学で利用されている。2003年に、数十万人規模で行った中学生・高校生に対する調査をもとに、IRT理論に沿って開発されているので、問題の版によって結果が異なるというような懸念がない。よって、例えば毎年受ければ、経年での学力推移の比較が可能となるというテストである。

もともと、入学時に大学での学びに必要な能力を持っているかどうかを判定するプレースメントテストとして開発された。文字通り習熟度別クラス編成に利用できるほか、補習・学習支援が必要な大学生の見極め、あるいは基礎学力の全体的な把握などにも利用できる。

日本語の IRT 診断テストは語彙に関しての 4 択問題100問からなり、マークシートに記入して解答する。採点の後、単一のスコアが出される他、高3レベル以上から中1レベル以下という 6 段階のレベルのどこに位置するかが判定される。語彙力だけが日本語力ではないが、簡便に日本語力に関する情報を得られるテストである。標準実施時間は45分とされているが、本学での実施では、それよりも早く終えてしまう学生が多かった。

## 2.2. Can-do 自己評価

自己評価に使用した Can-do statements とは、外国語教育や学習の分野において近年、利用が盛んになってきているものである。ある言語で何がどれだけできるかを「～できる」という形式の文で表したもので、日本語では能力記述文と訳される。これにより、言語学習の目標を明確に示すことができ、また言語学習の成果である運用能力を測る際にも、具体的な評価基準として使うことができる。特に、統合の進むヨーロッパでの言語政策において、欧州評議会が「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠」(Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment 以下、CEFR)を制定し、2001年に現在の形の CEFR が英語とフランス語で刊行されて以降、普及の度合いが進んでいる。ちなみに、日本語においても同様の Can-do を用いた「JF 日本語教育スタンダード」という学習ツールが開発されつつあるが、まだ完成にはいたっていない。

今回の調査に使用した Can-do statements は、著者を含めて日本語教育に携わる 3 名の教員が、CEFR の Can-do 一覧をもとに作成した。実際に使用したのは CEFR の Can-do statements を日本語に翻訳したものである。CEFR の Can-do 一覧には全部で493の能力記述文があり、A1から C2 の 6 レベルにそれぞれ振り分けられている。この 6 レベルの中で、日本人大学生が大学での学びにおいて日本語でできることを求められるレベルは、上から 2 番目と 3 番目である C1ないし B2が適当であるとして、Can-do

熟達した言語使用者	C2	
	C1	
自立した言語使用者	B2	
	B1	
基礎段階の言語使用者	A2	
	A1	

図 1 : CEFR における言語能力の共通参照レベル

statements の絞り込みを行った。この二つのレベルは、それぞれ自立した言語使用者の上位レベルと熟達した言語使用者の下位レベルに相当する (図 1 参照)。

C1 および B2 レベルとされている Can-do statements から、大学での学びに関係するものに限定して 20 項目とした (表 1 参照)。また、大学生が自己評価をする際にわかりやすいように、あるいは日本語という言語に合わせて文言などを調節した。表 1 が 20 項目の概要である。実際の自己評価に使用した文言は、稿末に掲載した。

自己評価シートには、これら 20 項目を記載し、各項目について「できる」「ほぼできる」「どちらともいえない」「あまりできない」「できない」の 5 段階の評定を設けた。「できない」を選んだ場合は 1、「あまりできない」という場合は 2、というように各段階が 1 から 5 の数値に対応するようにし、学生が自分の日本語スキルを考えた上で、1 から 5 の数値を一つ選んで丸で囲むという方法で記入するものとした。結果はこれらの数値で報告する。

### 3. 結果

#### 3.1. IRT 診断テストの結果

日本語 IRT 診断テストでは合計 235 人分の法学部 1 年生の結果が得られ

表 1 : Can-do statements 項目一覧

No.	項目の内容
1	漢字やかな遣いなどの正しい表記
2	場面に応じた語彙・表現の使い分け
3	文章や発言の展開の予測
4	句読点, 段落の正書法
5	事実文と判断文の区別
6	手紙やメールの形式や配慮ある表現
7	手紙やメールでの用件の正確な表現
8	授業の内容・表現の理解
9	学問的な語彙の理解
10	ノート・テイキング
11	段落構成 (パラグラフ・ライティング)
12	アウトラインの作成と利用
13	引用
14	引用のための要約
15	長い文章の理解
16	情報収集と整理
17	レポートでの主張
18	口頭発表の準備
19	口頭発表での主張
20	議論の際のコメントや考えの表明

た。最高スコアは731, 最低スコアは415であり, 平均は546.7, 標準偏差は61.5であった。全受験大学の平均スコアは594.7, 標準偏差は66.6であり, 法学部の結果はそれを下回るものであった。

レベル判定は, 学生の日本語力の多様さを改めて提示するものとなった。表2に各レベルの人数と割合を示す。

表 2 : 法学部 1 年生日本語 IRT 診断テストの結果 (人数と割合)

	中1 レベル 以下	中2 レベル	中3 レベル	高1 レベル	高2 レベル	高3 レベル 以上	合計
人数 (人)	12人	28人	61人	55人	31人	48人	235人
割合 (%)	5.1%	11.9%	26.0%	23.4%	13.2%	20.4%	100%

IRT 診断テストの本来の考え方に従えば、大学入学時には高3レベル以上と判定される力を身につけていることが望ましく、このレベルが大半となるはずであるが、実際に最も人数の多かったのは中3レベルであった。次に多いのが高1レベルであり、高3レベル以上の判定は全体の20%程度であった。中3レベル以下となったのは101人、全体の43%に上った。

比較のため、法学部1年生の結果と日本語IRT診断テストを2012年度に受験した全大学の結果をグラフにしたものを示す(図2および図3)。受験大学の詳細な情報はないが、国公立の大学も含まれているので、その影響で結果が高めになるということはあるだろう。だが、短期大学を含む私立大学のみ結果を見てみても、レベルごとの分布は全受験大学の結果とあまり変わりはない。高3レベル以上の判定であったものが47.4%となっている。中央学院大学法学部の結果は、私立大学の結果だけに限っても、日本語力に関して多様な、すなわち下位のレベル判定となるような学生が多く入学してきていることを示している。

各レベルの人数分布を見れば、下位の学生たちは決して少数派ではないことがわかる。中3レベル以下の判定が43%と半数近くに上っている。同様のレベル帯を全受験大学で見れば全体の19.0%、私立大学のデータでも19.8%

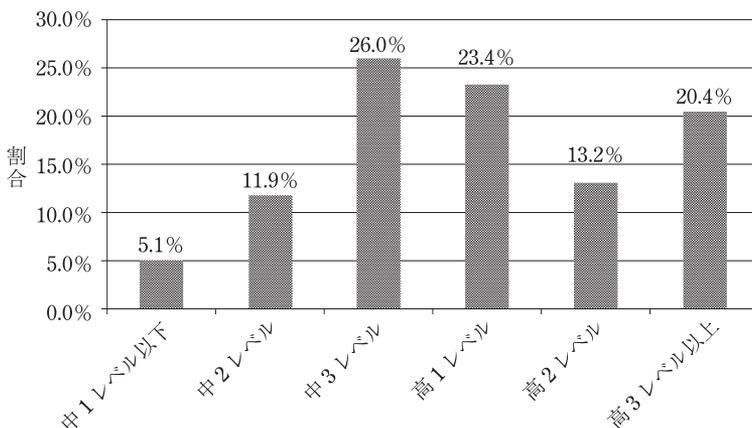


図2：法学部1年生IRT診断テストの結果（割合）

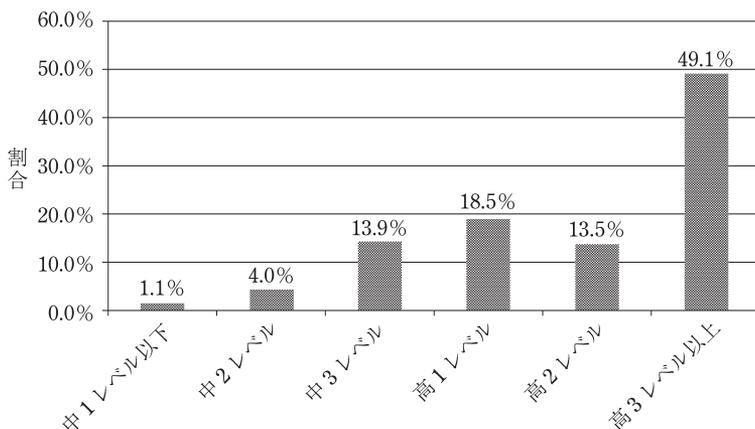


図3：全受験大学 IRT 診断テストの結果（割合）

であった。法学部の学生たちの「多様度」は今回の受験大学の中でかなり高いものと言える。

### 3.2. Can-do 自己評価の結果

Can-do 自己評価は、シートが A4版の表裏両面の 1 枚であったが、回収後、裏面の記入がないもの、また項目によって記入がないものが見つかった。1 項目でも未記入のものは除き、20項目すべてに記入があったものは 225人分であった。今回はこれをデータとし、結果を報告する。

学生たちの自己評価の点数を項目ごとに集計し、平均値を出して、その高い順に項目を並べたものが表3である。上にある項目ほど自己評価で「できる」と回答しているものとなる。

20項目すべての平均値は2.868で、3が「どちらでもない」に相当することを考えると、全体にやや低めの評価で「できない」ほうへ寄っている。項目別の平均値で、3を超えた評価となっているのは上位6項目だけであり、自己評価として「あまりできない」「できない」を選んでいる学生が多いと言える。

項目別に見て、法学部の学生が比較的「できる」と考えているものは、手

表3：法学部1年生 Can-do 自己評価の結果

No.	平均値	項目の内容
7	3.400	手紙やメールでの用件の正確な表現
8	3.329	授業の内容・表現の理解
2	3.236	場面に応じた語彙・表現の使い分け
6	3.196	手紙やメールの形式や配慮ある表現
3	3.173	文章や発言の展開の予測
1	3.053	漢字やかな遣いなどの正しい表記
4	2.978	句読点、段落の正書法
5	2.858	事実文と判断文の区別
13	2.773	引用
16	2.764	情報収集と整理
10	2.733	ノート・テイキング
17	2.724	レポートでの主張
20	2.724	議論の際のコメントや考えの表明
14	2.702	引用のための要約
19	2.698	口頭発表での主張
15	2.671	長い文章の理解
11	2.640	段落構成 (パラグラフ・ライティング)
9	2.604	学問的な語彙の理解
12	2.564	アウトラインの作成と利用
18	2.538	口頭発表の準備
平均	2.868	

紙やメール、授業の理解、語彙・表現の使い分けや表記といった、日常生活や今までの学習で慣れていると考えられるものが多い。逆に、比較的「できない」と考えている項目は、口頭発表やレポート、長い文章の理解や書き方に関係するものであった。1年生にとっては、これからの大学生活で重要となるアカデミック・ジャパニーズに関わる項目である。

### 3.3. IRT 診断テストと Can-do 自己評価の相関

今回の調査では、IRT 診断テストという客観テストのスコアと Can-do 自己評価による主観的な評価数値が得られた。この2種類のデータ間に関連があるのかどうかを見るため、相関を調べた。IRT 診断テストと Can-do

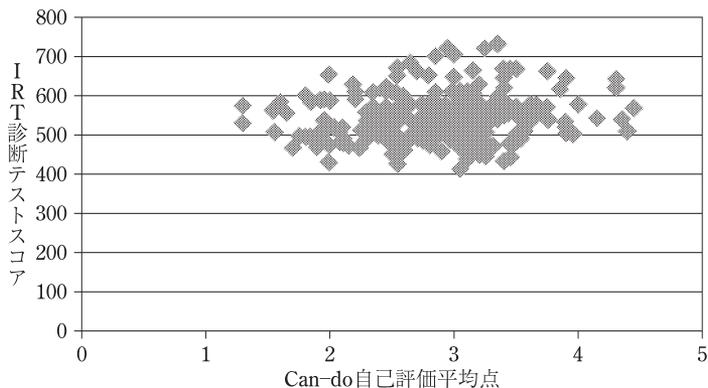


図4：IRT 診断テストスコアと Can-do 自己評価平均点の相関図

自己評価、双方揃っているものは222人分あり、これをデータとした。IRT 診断テストのスコアを一つの変数とし、Can-do 自己評価で1人の学生が20項目それぞれに対してつけた1から5までの点数の平均値をその学生のCan-do 自己評価平均点としてもう一方の変数とした。結果は、相関係数0.136 ( $p=0.043$ )で、ほぼ相関はないというものであった。図4はその相関図である。

テストスコアと自己評価点の間に相関が見られないことから、日本語力のレベルに差があっても、大学で求められる日本語スキル全般に関しての自己評価の高低にはあまり関係がないということが言える。日本語力が客観的に高いと判定される学生でも自分の日本語スキルに対する評価は、客観的に低いと判定される学生とあまり変わりはないということである。日本語の基礎力に関係なく、学生たちは大学で求められる日本語スキルに対して「できる」とは考えていない傾向が示唆された。

## 4. 考察

### 4.1. 日本語力の多様性

日本語 IRT 診断テストの結果からは、本学法学部の1年生については、受験した全大学の結果と比べて、下位レベルの学生が多いということが判明した。もっとも、授業の中でクラス分けや成績に関係なく、「調査研究のため」ということをアナウンスして受けさせたテストだけに、学生たちの気質を考える時、どれほど真剣に受けたかには疑問の余地がある。実際、標準実施時間の45分よりもかなり早く終える学生が多かったことを考えると、はたして日本語力測定は適切にできたのか、テストの信頼性に関して問題なしとは言えない。

だが、その点を考慮しても中3レベル以下43%、高3レベル以上は20%という数字は、学生の日本語力の「多様度」の高さを物語っているだろう。他大学では半数近くの受験者が高3レベル以上という判定になるのだから、それほど高度な能力が要求されているわけではなく、ある程度簡単に解ける問題であるからだ。

「日本語実践」では、これらの多様な日本語力を持つ学生たちを指導する。これだけの多様なレベルがあるのであれば、現在はまだ行われていない習熟度別クラス編成も検討する必要があるだろう。今回の結果では、大学で求められるレベルである高3レベル以上の学生は20%程度であった。この層を抜き出して、一般的に大学で指導されるべきと考えられる日本語スキル、たとえば今回の Can-do 自己評価で挙げた項目などを普通に組み込んだシラバスで授業をすることは可能であろう。それに対して中1レベル以下、あるいは中2、中3レベルというような層を対象として、そのような普通のシラバスは、はたして機能するだろうか。答えは否定的なものにならざるをえない。より基礎的な項目を重視する補習的な内容が求められると考えられる。

クラスの習熟度別編成は、実際に導入するとなれば、日本語力をどのように測定してクラス分けを行うのか、成績評価をどうするのか、時間割の編成や教室確保はできるのか、といった具体的な問題が次々に出てくる。しかし、これだけの日本語力の多様性に対応して、教育の質、また学生たちの「出口保証」を考える時、早急に取り組むべき課題であると言わざるをえない。

#### 4.2. 大学での学びに必要な日本語スキル

Can-do 自己評価の結果は、全体的な傾向としての学生たちの自己評価の低さ、「できない」と考える項目の多さやその度合いを示した。特に自己評価の低かった項目は、口頭発表やレポート、長い文章の理解や書き方に関係するものであった。これらの日本語スキルは、大学での学びには重要であるが、高校までの国語教育ではあまり身につけてこれなかったということが推測される。日本語 IRT 診断テストと Can-do 自己評価の点に相関がほとんど見られなかったことから、日本語力のレベルに関わらず、これらのスキルは習得の程度が低いと言える。

日本の国語教育への批判は本稿で扱う範囲を超えてしまうので深く言及しないが、道徳教育や文学教育に偏っているという批判は、既にかかなりの程度で普及している。学力低下の問題とともに、こうした批判への対応として、小学校から高校までの「国語」の授業でも口頭の議論や発表、レポートなどの論理的な文章の書き方などが内容として入ってきてはいる。文部科学省は2011年度から2013年度にかけて小・中・高等学校の学習指導要領を改訂するが、そこでは「言語活動の充実」が一つの大きな改善事項として挙げられてもいる。

が、このような動きの効果を期待するのはまだ早いであろう。今回の結果でも学生たちは大学で学ぶにあたっての基礎となる日本語スキルに関して全体的に「できない」という低めの自己評価をしている。ノート・テイキングや長く複雑な文章の理解といった基本スキルができない状態では大学の授業

についていくのは難しい。論理的な文章を書くことができなければレポートや記述試験で困るだろう。また、従来の教育では重視されてこなかった口頭での議論や発表は、現在の社会的変化を見れば今後重要性がますます高まることは明らかである。

このように、学生たちが「できない」と考えるスキルに関しては、彼らの日本語力に考慮しつつ積極的に指導すべきである。アカデミック・ジャパニーズに関しては、以前の高等教育では教養教育や専門教育の課程で自然に習得されるものとして、これらを特に取り上げて指導するということはなかった。しかし、近年は日本語力向上を目的とした授業が次々に設置され、日本語スキルの指導は特に珍しいものではなく、ほぼ一般化したといえてよい。

そのような授業の中でまずすべきことは、大学での学びにはそのようなスキルが必要なのだということを学生に自覚させることである。大学入学時までに自然習得した母語では、日本語の「スキル」という考え方自体、新しい発想であるかもしれない。まずは母語でできないことがある、足りないスキルがあるということの自覚を促すことが肝要だろう。その方策として Can-do statements の提示や自己評価は有効なものとする。

## 5. おわりに

今回の調査では、IRT 診断テストと Can-do 自己評価という学生の日本語力に関する2種の情報を得ることができた。日本語力の評価・測定は、それ自体さまざまな方法・考え方があり、単純に議論することはできないが、新入学生たちの日本語力は多様化が進み、実際の日本語運用に関して予測が困難になっているというのは事実である。

また、今回の調査対象者はすべて日本語母語話者であったが、今後、日本人でもなく留学生でもないという、日本語に関して「第3の」グループとも言うべき層の入学が増えてくる可能性がある。たとえば、中学・高校時に日本に来日して日本人と同様の入学試験を受けて入ってくる者、また父親か母

親、あるいはその両方が外国人で日本に住みながら家庭では外国語で育った者などである。なんらかの理由で日本語が完全な母語ではない人たちの入学は既に始まっており、グローバル化の社会情勢を考えれば、今後増えることは十分に予想される。

このような状況下では、学生の日本語力について情報を得ることは極めて重要なことである。信頼できる正確なデータに基づきながら、指導体制、授業内容を判断していくこともますます重要になっていくだろう。今後も、日本語力の実態を把握するための調査を継続していく必要がある。

#### [参考文献]

- 1) 田島ますみ・佐藤尚子 (2012) 「大学生の日本語スキルに対する自己評価—Can-do statements を使った診断調査の結果報告—」, 『第8回日本リメディアル教育学会全国大会発表予稿集』, pp.120-121.
- 2) 日本リメディアル教育学会監修 (2012) 『大学における学習支援への挑戦——リメディアル教育の現状と課題——』, ナカニシヤ出版.
- 3) 吉島茂・大橋理恵訳・編 (2004) 『外国語教育II——外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠——』, 朝日出版社.  
[4) の日本語訳]
- 4) Council of Europe (2001). Common European Framework of Reference for Languages : Learning, teaching, assessment. Cambridge : Cambridge University Press.
- 5) 経済産業省「社会人基礎力」  
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.htm> (2012年11月25日参照)
- 6) 厚生労働省「若年者就職基礎能力の修得の目安」  
<http://www.mhlw.go.jp/general/seido/syokunou/yes/01.html> (2012年11月25日参照)
- 7) 国際交流基金「JF 日本語教育スタンダード」  
<http://jfstandard.jp/top/ja/render.do> (2012年11月25日参照)
- 8) 学ぶ人のための基礎教養講座 ManaJin「IRT 診断テスト」  
<http://manajin.info/irt/> (2012年11月25日参照)
- 9) 文部科学省「新学習指導要領・生きる力」

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/index.htm) (2012年11月25日参照)

10) 文部科学省「OECDにおける『キー・コンピテンシー』について」

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/05111603/004.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/05111603/004.htm) (2012年11月25日参照)

〔資料〕

自己評価調査に使用した Can-do statements

1. 漢字やかな遣いなどの正しい表記ができる。
2. それぞれの場面（公的か私的か、話し言葉を使うか書き言葉を使うか、など）に応じて語彙・表現を使い分けることができる。
3. 文章や発言における表現を手がかりにして、相手の考えや感情を推測し、次に何が来るか展開を予測できる。
4. 読み手が内容を正確に理解できるように、句読点を打ったり段落の区切りを示したりできる。
5. できごとを客観的に述べた文と、できごとについて書き手のとらえ方（考え）を述べた文を区別し、書き分けることができる。
6. 手紙やメールなどの文書でのやりとりにおいて、形式にのっとって書くことができ、相手に配慮した表現ができる。
7. 手紙やメールなどの文書でのやりとりにおいて、自分の伝えたいことをはっきりと正確に表現できる。
8. 授業で話される内容や使われている表現を聞いて理解できる。
9. 大学の授業で使われるような学問的な語彙が理解できる。
10. 授業で、板書を写すだけでなく、授業の内容を再現できるような詳細なノートを取ることができる。
11. 段落の中のそれぞれの文の役割を意識して、わかりやすい構成で段落を書くことができる。
12. レポートや口頭発表の原稿を書く際に、思いついたところから書き始めることはせず、全体の構成や流れを構成メモ（アウトライン）にまとめてから書くことができる。
13. 引用のルールに基づいて、他の人の文章を自分の文章に引用できる。
14. 他の人が書いた文章を、自分の文章に引用するのに適切な形で要約できる。
15. ある程度長い、複雑な文章を詳細な点まで理解できる。
16. レポートを書いたり口頭発表したりするために必要な情報を集めて整理で

きる。

17. レポートを書く際、取り上げた話題について、根拠や例を示して論点を展開し、自分の考えが主張できる。
18. 口頭発表するために必要な手順を知っていて、発表用資料の作成も含めて準備ができる。
19. 口頭発表をする際、取り上げた話題について、根拠や例を示して論点を展開し、自分の考えが主張できる。
20. 議論のときに、相手の反応や意見などに対して適切なコメントや自分の考えを述べ、よりよい議論を行うことができる。